

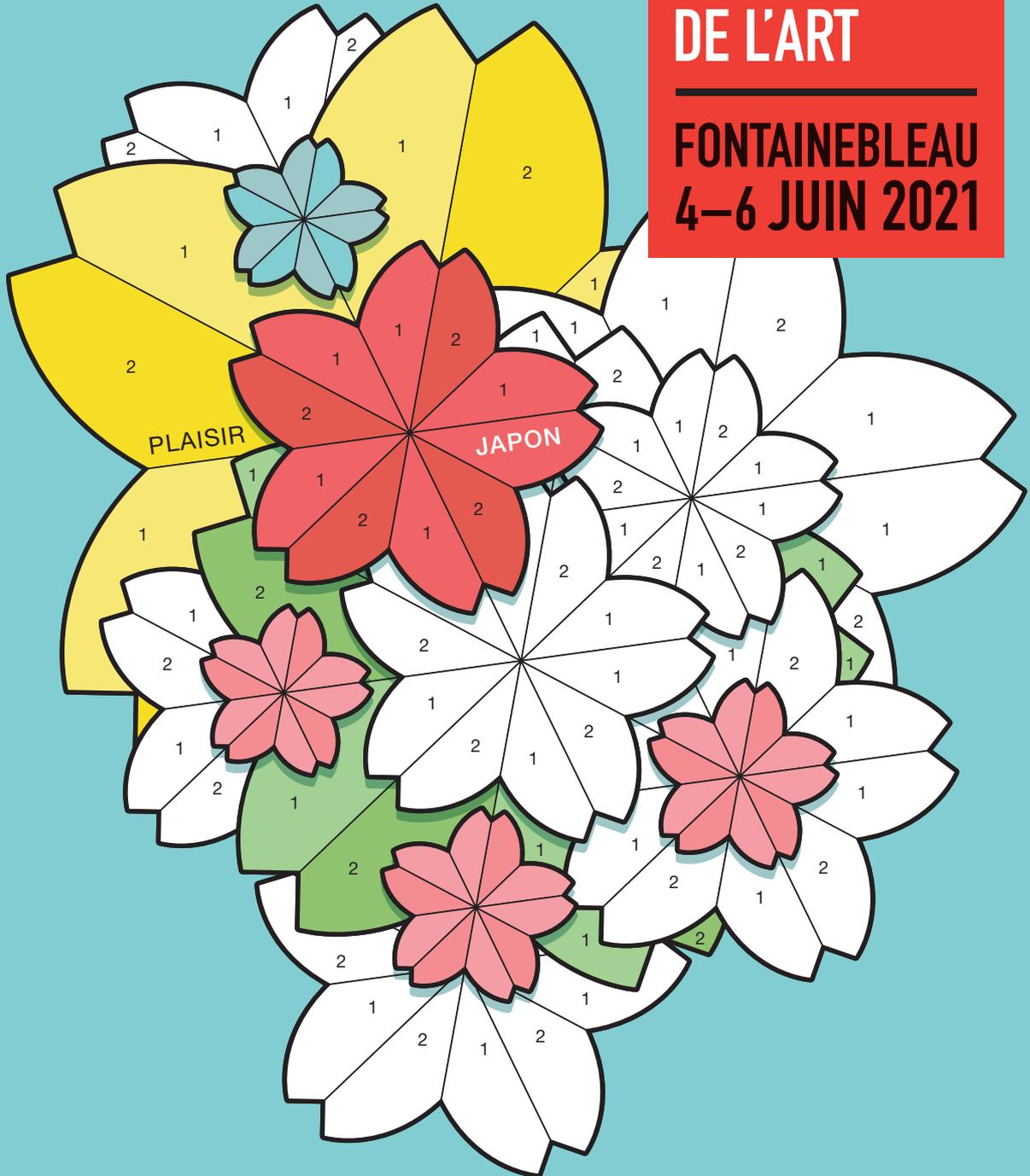


MINISTÈRE
DE LA CULTURE

Liberté
Égalité
Fraternité

FESTIVAL DE L'HISTOIRE DE L'ART

FONTAINEBLEAU
4-6 JUIN 2021



プレスリリース

第10回美術史祭

特別招待国日本

テーマ「喜び／プレジール (plaisir)」

2021年6月4日から6日、

フォンテーヌブロー城および市内で

ロズリーヌ・バシュロ＝ナルカン文化相は、来たる6月4日から6日、フォンテーヌブロー城および市内で「第10回美術史祭」の開催を発表いたします。今年のテーマは「喜び／プレジール (plaisir)」です。特別招待国として日本を招きます。

まさに世界にひとつの祭典。国立美術史研究所ならびにフォンテーヌブロー城の共同企画で開催いたします。一般の美術史愛好家から専門家の皆さんにまで楽しんでいただけるよう、先史時代からコンTEMPORARYなクリエイションに至るまで、美術および文化財の歴史について豊かなパノラマを企画いたしました。「美術史祭」のプログラムは講演会や座談会、討論会、映画上映、アトリエ、作品鑑賞など様々です。美術史専門家や芸術家、建築家、映画監督、作家や俳優らが世代を問わず一堂に会するまたとない機会。発見や分かち合い、初の対決など感動の体験へご招待します。また、現状をふまえ、「第10回美術史祭」は、その野心に妥協することなくかつ参加者や来場者の皆さんを安全にお迎えできるよう、ハイブリッドな実施形態で展開してまいります（通常の対面方式と遠隔方式）。

「美術史祭」の開幕を飾る特別イベントとして、現代を代表する偉大な芸術家の一人であるアネット・メサジェさんの講演や美術史春季大学の名誉客員でもある芸術家ジェラルド・ガールストさんの講演のほか、「Les collections japonaises du Château de Fontainebleau. Art et diplomatie.」（「アートと外交～フォンテーヌブロー城に見る日本の芸術作品」（仮訳））展の開会を予定しています。



[01] フォンテーヌブロー城 © Mathilde Hermouet

今年はハイブリッド形態ではあるものの、これまでの「美術史祭」の構造と精神を損なうことのないプログラムで、招待国の美術史および今年のテーマを軸に、講演・座談会・討論会・作品のレクチャー・上映会など多岐にわたります。今年のテーマは喜び。それは創造する喜びであり、見て、触って、感じて、聴く、つまり五感を介した喜び、そして魂で感じる

喜びでもあります。そして招待国、日本。「日出ずる国」の昔と今に刻まれる創造性の素晴らしさを、古い建築と新しい作品、伝統工芸品と現代的なデザインなどの観点から考察します。ジャポニズムや日本庭園の歴史と日本国外へと広がった日本庭園、漫画文化、1960～1970年代の社会運動、国際社会における日本のコンテンポラリーアートの位置づけについてなど、様々な側面から観察し理解を深めます。内容豊富な一連の講演ですが、その前に裏千家による茶の湯をお楽しみください。招待国への敬意をこめると同時に、日本の伝統的なおもてなしの心で、参加者や来場者の皆さんを歓迎いたします。

多種多様な形式で、かつ各分野を繋ぐイベントを盛り込んだ今年の「美術史祭」。専門家や所属する教育課程を問わず多くの教員・研究員を招き、誰でも美術史に親しめるように工夫しました。皆さんの興味・関心に導かれるまま、場内を自由に散策してください。とかく謎に包まれがちな美術史という学問の生き生きとした真の姿をご覧いただけるよう、美術史の世界への扉を用意しました。本質的かつ幅広いテーマを扱っています。たとえば日本庭園なら、その歴史や茶の湯、建築との関係についての講演を聞いたり、1873年ウィーン万国博覧会で初めて海外に紹介された日本の「小さな木」、盆栽の初期の収集家の趣味について学んだあと、会期中フォンテーヌブロー城内に展示されている盆栽を鑑賞したり。さらに美術史家の説明でフランソワ1世に招かれたイタリア人芸術家らの影響をうけたフォンテーヌブロー城のルネサンス様式の間を飾る大壁画を鑑賞しながら、西洋美術における裸婦像の役割について考えます。



[02] 「浮庵（フアン）」 © KKAA, Courtesy Galerie Philippe Gravier

まず基礎知識をつけたいという方には美術史の基本が分かる入門教室はいかがでしょうか。フォンテーヌブロー城の講師陣らによるミニ講演やレッスン、短編映画の後、城内に展示されている作品を鑑賞したり創作アトリエに参加してみてください。

プログラムには現代的なインスタレーションも含まれます。現代を代表する偉大な建築家の一人である隈研吾さんデザインの茶室「浮庵（フアン）」が城内の Saint-Saturnin（サン＝サテルナン）礼拝堂内に浮かびます。庭園内を散策すればパリを拠点に活躍する若き日本人建築家 田根剛さんのかりそめの住宅。庭園の中でも少し外れた場所にある grotte des Pins（松の洞窟）では松本俊夫監督の実験映像2作品を連続上映しています。さらに英国人アーティストであり理論家のヴィクター・バーギンさんによるビデオ・インスタレーションも市立劇場内のホールでご覧いただけます。

映画プログラムでは、日本映画の高い質と多様性を実感していただけるように、様々な時代の様々なジャンルをご紹介します。歴史映画からピンク映画（官能映画）、アニメーション映画（宮崎監督作品）からドキュメンタリー、アヴァンギャルド的な幽霊映画、そして現代映画界注目の星、富田克也監督や瀬戸桃子監督作品など。さらに1980年代以来怪奇映画の常識を覆しつつ、現代日本において「共に生きる」とはどういうことかを内面から問いかける黒沢清監督を特別にご招待いたします。そして映画の喜び。当初は見世物という位置づけでしたが、瞬く間に人に喜びを与え、あっと言わせ、好奇心を満たし、人気を博したのです。無声映画から現代映画までを網羅したプログラムを通し、スクリーンに登場した最初の裸体、陽気で愉快な道化の放浪、狂乱の時代のギャルソンヌ、美しいものを愛でる喜び、暴力的・殺人的な衝動についても考察します。

3日間の開催期間中、家族で楽しめるイベント（通常の見学やバーチャル見学、コンサート、教室など）も豊富で、フォンテーヌブロー城を知り、あるいは再発見する機会となっています。そして城に響き渡る様々な音楽。ジャポニズムを連想させる音楽や19世紀のフランス音楽、狩猟らっぱのコンサートなどをお楽しみください。

また今年もおよそ100の出版社が集まる本の見本市が開かれ、作品を紹介しに来た作家本人に会えるブースもあります。今年の特徴は日本の漫画に焦点をあてた特設コーナー。アングレームにある国際フランス漫画館とマンガ・カフェによる設営です。

我々は、この「美術史祭」が美術史に関連するすべての業種が集まる場所であり、この道を選んだことで得られた喜びについて語り合える場となってほしいと願ってやみません。研究という道を選んだこと、造形芸術について書くということ、展覧会を企画すること、芸術品を収集すること、あるいは修復すること、様々な喜びがあるものです。

また「美術史祭」では文化財に関するイベントにも力を入れており、文化財の修復や保存の最新技術について学んだり、現代社会における文化の位置とその役割について考察します。また今年フランス国立博物館局と共同でワークショップを開催するほか、専門分野での就職を決めるうえで役に立つ若手研究者や学生を対象としたワークショップを予定しています。

また国民教育省の養成セミナーである美術史春季大学も例年通り、2021年の「美術史祭」と並行して3日間の予定で開かれます。

美術史という学問は、創作活動の種類や時期、領域などを全く問いません。歴史とはいいますが、芸術家やクリエイターの皆さんの参加があつてこそその祭典です。我々の招待を快諾してくださったジャンヌ・バリバール、ニコラ・ブラール、ヴィクター・バーギン、フタムラヨシミ、ジェラルド・ガルス、勝間田千恵子、川俣正、黒田アキ、黒沢清、隈研吾、ジャン＝ジャック・ルベル、エティエンヌ・レクロアール、清真美、松谷武判、アネット・メサジェ、永澤節子、オノデラユキ、辻仁成、ピエール・レメ、田根剛ら各位にこの場をお借りしてお礼申し上げますとともに、皆さんの成功をお祈りします。